

# 言語空間モデルの視点から見た日本語の条件文

## — 「ば」「たら」「と」の三形式を中心に

劉 曉 華

(国際教育交流センター 大連外国語大学交流教員)

### キーワード

日本語の条件文 三次元空間モデル 認識 度合い

### 要旨

本稿は、多様な形式と用法を持つ日本語の条件文を、さらに理解しやすくなるように整理するという目的で、言語空間モデルという発想から「ば」「たら」「と」の三形式を中心に、その意味用法への理解を検討してみた。

本稿では、まず先行研究を踏まえ、三形式の意味用法を再整理した。その上で、条件表現にかかわる各相関要素を「条件の必要性」、「結果の必然性」、「条件の実現性」（つまり時間性）と三つ抽出した。また、「度合い」という発話者の各相関要素への認識度の強弱を表す概念を取り入れ、多要素の相関作用による日本語条件表現における三次元空間モデルの構築を試みた。本稿で構築した空間モデルは認知言語学における図式の一つになると主張し、条件表現の三形式を一つの図式で表し、その図式を用いて、条件文の意味用法への理解や解釈を行う可能性を検討するのが本稿の目的とする。また、本研究の成果が日本語教育現場に役立つものになると考える。

### 1. はじめに

人間社会における言語活動の中では、どの言語においても、条件表現がなくてはならない存在である。それは、時間的にも空間的にも限界性をもつ言語主体にとっては、自ら経験できることが限られているからだと思われる。したがって、実際の言語生活において、言語主体が仮定的な表現を用いて、仮想的世界を作り上げ、事柄間の因果関係に対する認識を用いて、客観

的な論理なり個人的な論理なりから推論を行うことによって、自分の判断や意志を述べたり、他者に依頼や要求をしたりする言語活動が次第に必要とされるようになる。また、言語主体がこういう言語活動を通じて、自分や他者に積極的に働きかけ、客観世界とのコンタクトを取っていると思われる。

言語主体つまり、認知主体と認知過程の多様性によって、条件表現の使用とその意味用法の理解がいつそう複雑化された。特に日本語の条件表現には「ば」「と」「たら」「なら」の四形式がある上に、各形式はそれぞれ固有の特徴を持っており、使い分けが要求される反面、お互いに置き換え可能になる場合も少なくない。そのため、日本語の条件表現を対象に、多くの言語学者が意味論、構文論、認知論、語用論などの視点から数多くの論述がなされてきた。その成果として、各形式の意味と用法、それぞれの特徴がずいぶん明らかになってきた。しかし、今までの研究では、多かれ少なかれ特例が存在しており、その解釈の不完全性を示している。さらに、研究が進むことによって、次々と新たな見解が発表され、条件文の意味用法はますます明らかにされていく一方で、それに関する解説がより細かく、より複雑になった現状はかえって、条件文の理解や使用を難しくさせているとも考えられる。

本稿は、言語表現の世界において、言語形式の使用に深くかかわる各相関要素間の関連性とその変化を示す体系構造が存在すると仮説を立てる。数学用語を用いて言うならば、言語表現の世界には、条件表現という表現形式の言語空間モデルが存在すると主張する。こういう空間モデルという図式を用いて、より全面的かつ系統的に条件表現の意味用法を解説したり、理解したりすることができるのではないと思われる。

そこで、本稿では、四形式を持つ複雑な日本語の条件文を、さらに理解しやすくなるように整理するという目的で、言語空間モデルという発想から「ば」「たら」「と」の三形式を中心に、その意味用法への理解を検討してみる。

## 2. 従来の研究と本稿の立場

この節では、有田（1993）に基づき、従来の研究における条件文への扱い方を概観してみる。

### 2.1 関連性と事実性

日本語の条件表現に関しては、有田（1993）は多くの先行研究をまとめている。ここでは、それらの研究は大きく分けると二つの観点からなされてきたと述べている。

- (A) 前件（条件節）と後件（帰結節）の間の関連性という観点
- (B) 前件（場合によっては後件）に表されている事態に対する話し手の事実認識という観点

まず、関連性について言えば、日本語の複数の条件形式には、前件と後件の関連性の質の違いが反映されているとする見方が一般的である（有田2006. P22）。日本語の条件文の前件と後件がどのような「関連性」を持つのかという観点から行われてきた代表的な研究には山口（1969）、森田（1967）、益岡・田窪（1989）、W・M・ヤコブセン（1990）などがある。次の表1は益岡・田窪（1992. P192-193）をまとめたものである。

表1 日本語における条件の表現

法則的依存関係 (因果関係)	偶有的依存関係		仮定的事態間の依存関係
	事実認識	事態の実現	
ば	と	たら	なら (とすれば・としたら・とすると)

(筆者による)

また、W・M・ヤコブセン（1990. P100）は「「関連性」の問題を抜きにしては、条件文の本質を捉えることはできない」と指摘し、「条件文の前後事態を結びつける関連性は、その原形において、一方の事態が先にあって、もう一方の事態が時間の流れにそってそれに付随するという、時間的共起性にすぎないということである」としている（1990. P107）。この「時間の共起性」という要素に関する指摘は条件表現に見られた「と」・「たら」形式の用いた「事実的用法」の裏づけになるたいへん有意義な示唆であると考えられる。W・M・ヤコブセン（1990）によって指摘された条件文の前件と後件に見られる関連性をさらに、「原因—結果という現象間の依存関係」、「前提—帰結という認識上の依存関係」、「前後事態間の時間上の共起性」という三つのパターンにまとめられると考える。

一方、「関連性」という研究視点に対して、事実をどう捉えるかという観点から行われてきた研究もある。条件表現への理解は話し手が条件節に出た事柄の「真実性」（リアリティー）に対する認識から始めるべきだと主張し、条件文と因果文との比較を行うことによって、条件文の特徴を考察する立場である。代表的な先行研究は山田（1908）、松下（1928）、前田（1991a）などがある。以下の表2は前田（1991a）がまとめたものである。

表2 論理文

リアリティー	順接	逆接
仮定的	条件文	逆条件文
事実的	原因・理由文	逆原因文

前田直子（1991a. P31）

さらに、前田（1991b）では、「条件的用法」と「非条件的用法」の二つに分けて、条件文の四形式の意味と用法の使い分けを説明している。「条件的用法」をさらに、「仮定的」と「非仮定的」の二つに分け、網羅的な分類を提示した。有田（1993. P273）にも指摘があったように、「条件文を理由・原因文と関連付けて捉えることができたのと同時に、個々の条件形式の使用の傾向がさらに細かいところまで明らかになった。しかしながら、前田自身も指摘しているように、四形式の使い分けについては、「明快な基準を打ち出すことは完全にはできず」、問題点を残している。」としている。

## 2.2 四形式条件文の分類

日本語の条件表現に用いられた形式は「ば」・「と」・「たら」・「なら」の四つもある。この四形式はまったく同質のものなのかどうか、その違いはなんであろうかという問題は常に、学者から大きな関心が寄せられてきた。ここでは、益岡（1993、2006）と、奥田（1986）などの研究に注目したい。

益岡（1993）では、「文の概念レベル」と条件節の形式の分化という観点からバ形式、タラ形式、ナラ形式を中心に考察している。その結果としては、タラ形式とナラ形式をバ形式の分化として捉えた上で、その形式の分化は文の概念レベルを反映するものであるという見解に到達した。「レバ」形式が「事態命名レベル」で、「タラ」形式が「現象レベル」であるというのに対し、「ナラ」形式が「判断レベル」であると主張している。益岡（2006）では、引き続き、バ形式の分化が文の意味的階層構造とのかかわりを詳しく考察し、両者が深く関係することを指摘した。その結果、バ形式の分化が一般事態階層・個別事態階層・判断階層という三つの階層の違いを投影しているということを明らかにした。具体的には、レバ形式、タラ形式、ナラ形式がそれぞれ一般事態階層、個別事態階層、判断階層に位置するという側面と、それらの用法に一定の重なりが見られるという側面の両面が認められるということが判明した。

奥田（1986）では、条件的な複文には「ば」形式と「なら」形式が含まれているが、「と」形式と「たら」形式はそれとは異なる「契機的なつきそい・あわせ文」というカテゴリーに属すると規定している。さらに、「ば」と「と」を「対象の論理」の表現形式に、「なら」と「たら」を「私の論理」の表現形式という論理の立て方から同じカテゴリーに属する複文の内部を再分類し、複文の主節における文のモーダルな意味によって、条件文の分類を行うべきと指摘している。

## 2.3 本稿の立場

本稿は、益岡（1993b）の「文の概念レベル」の観点をふまえて、条件表現の「ば・と・たら」



形式は「なら」形式とは次元の異なるものと扱って考えることにする。紙幅の都合によって、本稿は「ば・と・たら」形式に絞って、考察を試みる。

益岡（1993、2006）や有田（2007）は「ば・たら・なら」の三形式を仮定条件形式として中心に扱っている立場であり、原則的には、「と」形式を条件を表す表現と認めないことにしている。そのため、条件表現の四形式の関係を全体的に捉えることには限界があると思われる。例えば、次の例は、いずれも「と」形式を用いた仮定的な条件を表すものである。

- (1) 水にナトリウムを大量に混合すると、爆発が起こる。
- (2) 急にベッドから起きるとめまいがする。

このように、「と」形式も前件の事態が後件の事態を引き起こすという因果的な関係を表す場合があるため、本稿では、「なら」形式以外の「と」形式を含めた三形式を研究の対象とする。

言語について考える場合、言語を生み出し、使用し、そしてそれを組み変えていく存在としての人間をも合わせて考えなくてはならない（池上 2011）。日本語の条件表現は他の言語に見られない多形式を持っている。その上、その使用には個人差が大きいと多くの研究で指摘されている。こういう多形式の類語表現の現象を考える際に、言語形式そのもの以外に、発話意図、心的態度など言語主体に関わる要素にも特に目を向ける必要があると考える。そこで、従来の研究で明らかになったことに基づいて、日本語の条件表現の使用の仕組みをもっと分かりやすく説明できないかと、条件表現における言語空間モデルの構築を試みる。言語主体がつねにこの言語空間モデルを意識しながら、言語形式の選択をして発話していると仮定する。

以下では、先行研究を踏まえ、三形式の意味用法を再整理する。その上で、条件表現にかかわる各相関要素を抽出し、「度合い」という発話者の各相関要素への認識度の強弱を表す概念を取り入れ、多要素の相関作用による日本語条件表現における三次元空間モデルの構築を試みる。本稿で構築した空間モデルは認知言語学における図式の一つになると主張し、条件表現の三形式を一つの図式で表し、その図式を用いて、条件文の意味用法への理解や解釈を行う可能性を検討してみる。

### 3. 相関要素の抽出

「ば」・「と」・「たら」の三形式は次の例が示したように、三形式のいずれも使用できる場合と一形式しか使用できない場合がある。

- (3) この薬を {飲むと／飲めば／飲んだら}、風邪はすぐ治りますよ。
- (4) 明日天気が {良ければ／良かったら／\*良いと} ドライブに行きます。
- (5) ホテルに {着いたら／\*着けば／\*着くと} 家族に電話をします。

- (6) 李さんはバスに {乗ると／\*乗ったら／\*乗れば}、一番後ろの席に座りました。  
(7) これさえ飲めば運動しなくても痩せられます。

このような現象を生み出す理由については、従来の研究で、いろいろな立場から論述されていて、明らかになったことが多い。本稿はこれらの現象を一つの空間モデルを用いて、より理解しやすくすることを目的にするため、この節では、三形式の共通する意味用法とそれぞれ各自が持つ意味特徴を再整理し、空間構築の相関要素を抽出して、考察を進める。

### 3.1 三形式の意味用法に関する再整理

条件文が表す意味関係については、本稿では、「事実的な因果関係」を表す「原因・理由文」に対して、条件文は「仮定的な因果関係」を表す因果文であると考えられる。つまり、「因果文」が上位カテゴリーであり、「原因・理由文」と「条件文」がそのカテゴリーのメンバーであるという立場をとる<sup>1</sup>。しかし、実際の言語使用においては、三形式も用いた条件文は一口に「条件文」といっても、「仮定的な因果関係」を表す表現のほかには、「事実的な用法」、「論理的及び一般的な事実」を表すものもある。本稿では、これらの表現も含めて、「条件表現」と扱うことにするが、以下では、「条件文」と呼ぶことにする。この「条件文」をさらに「仮定関係」「事実関係」「論理関係」の三つの下位カテゴリーに分けて、分析を行う。次の表3は三形式の意味用法に関する先行研究を再整理したうえで、条件文の前後の意味関係と使用可能な形式及びその例文を提示してまとめてみたものである。本稿で規定した「仮定関係」というのは、「まだ起こっていない二つの事柄を表す用法」のことであり、それをさらに、「前件の事柄が起こるかどうかわからない「仮定的」と「前件の事柄が確実に起こる「確定的」の二種類に分けて考える。「事実関係」<sup>2</sup>というものは、表3のAの「前件も後件も既に起こった事柄を表す用法」と表3のBの「前件のみが事実で、その事実に基づき、後件の判断や推測を行う用法」の二種類の用法のことであり、Aの文末が過去形になるのが特徴である。「論理関係」というのは、「社会や自然界などにおいて、論理的及び一般的な事実や恒常的な現象あるいは個人などの習慣、習性を表す用法」のことであり、「事実関係」と「論理関係」は意味関係から見れば、「条件文」にはならないが、言語形式は条件表現の形式を用いるため、本稿では、「仮定関係」の表現とつながりがあるとして、研究の対象に入れることにする。

なお、紙幅の都合で、「反事実的な用法」は表には入れていないが、使用形式は三形式の中で、使用できない形式は「と」のみであるということを断っておく。

表3 三形式の意味用法に関する再整理

仮定関係	仮定的	三形式可		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 雨が {降れば／降ると／降ったら} 道が渋滞する。</li> <li>○ 薬を {飲めば／飲むと／飲んだら}、痛みが治まるだろう。</li> <li>○ 景気が {回復すれば／回復すると／回復したら}、個人消費が伸びる。</li> </ul>	
		二形式可		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 仕事が早く {終われば／終わったら}、お酒を飲みに行きましょう。</li> <li>○ 時間が {あれば／あったら}、案内してくださいね。</li> <li>○ {暑ければ／暑かったら}、クーラーを付けましょう。</li> </ul>	
		一形式のみ	たら	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 食事が済んだら、私の部屋に来てください。</li> <li>○ 京都に行ったら、一緒に寺巡りをしましょう。</li> <li>○ ご飯を食べたら、10時まで勉強します。</li> </ul>	
			ば	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校に近ければ、家賃が高くてもいいです。</li> <li>○ これだけあれば、普段の生活は困らない。</li> <li>○ 練習が楽しければこそ、上達が早くなる。</li> <li>○ スイッチさえ入れれば、すぐ使えます。</li> </ul>	
確定的	三形式可		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 明日に {なれば／なると／なったら}、血液検査の結果が分かります。</li> <li>○ 来月に {なれば／なると／なったら}、少し暇になります。</li> <li>○ 二十歳に {なれば／なると／なったら}、お酒を飲むことができます。</li> </ul>		
	一形式のみ	たら	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 夏休みになったら、一緒に旅行に行きませんか。</li> <li>○ 10時になったら、私の研究室に来てください。</li> </ul>		
事実関係	既定事態の述べ立て (A)	発見の状況	二形式可	異主語	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教室に {入ると／入ったら}、もう先生が来ていました。</li> <li>○ ドアを {開けると／開けたら}、父が倒れていました。</li> <li>○ 駅に {着くと／着いたら}、友達はまだ迎えに来ていた。</li> <li>○ 机の上を {見ると／見たら}、手紙が置いてあった。</li> </ul>
		きっかけ	二形式可	異主語	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 兄が {殴ると／殴ったら}、弟は泣き出した。</li> <li>○ えさを {やると／やったら}、犬は喜んで食べた。</li> <li>○ 夜に {なると／なったら}、だんだん寒くなってきた。</li> <li>○ 運動を {やめると／やめたら}、急に太ってきました。</li> </ul>
				同主語	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 翌日の結婚式のことを {考えると／考えたら}、なかなか眠れなかった。</li> <li>○ 波の音を {聞くと／聞いたら}、急に子供の頃のことを思い出した。</li> <li>○ 父は横に {なると／なったら}、すぐに眠ってしまった。</li> </ul>
	動作の連続	一形式のみ	同主語	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 男はポケットから鍵を取り出すと、ドアを開けて部屋に入った。</li> <li>○ 部屋に入ると、帽子を取った。</li> <li>○ ボールはころころ転がると、穴の中に落ちました。</li> <li>○ サッカーの試合を見るため、部屋に入ると急いでテレビを付けました。</li> </ul>	
	既定事態に基づく推測・判断 <sup>3</sup> (B)			<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ここまで来れば、彼も追いかけては来ないだろう。</li> <li>○ こんなに雪が積もると、家から出られない。</li> <li>○ ここまで送ってもらおうと、もう一人で帰られる。</li> <li>○ それだけ上手に話せたら、面接試験は心配ないだろう。</li> </ul>	
論理関係	恒常現象など	二形式可		<p>論理的及び一般的な事実・自然現象・習慣 (個人や団体・現在及び過去)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 9を3で {割ると／割れば}、3になります。</li> <li>○ 体温が {上がると／上がれば}、汗が出る。</li> <li>○ 氷が {溶けると／溶ければ}、水になる。</li> <li>○ 春に {なると／なれば}、桜が咲きます。</li> <li>○ うちの子供は時間が {あると／あれば}、いつもテレビを見ています。</li> <li>○ あの頃は学校へ {行くと／行けば}、図書館に寄ったものだ。</li> </ul>	

### 3.2 三形式の意味特徴

表3に示したように、三形式がいずれも使用可能の場合は「仮定関係」に限られている。従来の研究では、このような現象については、三形式の置き換えが可能であり、ただ、それぞれ異なるニュアンスを伴うと指摘されている。しかし、実際の言語活動においては、発話者がこの三つの形式から発話場面や発話意図に適合したいずれかを選択しながら、自分の意思を適切に表現しなければならないのである。母語話者の場合は、その使い分けがうまく説明できなくても、適切に使い分けている。その使い分けは「個人差」という見方で考える立場もあるが、同じ発話者が発話に際して、三形式から一つ選んで適切に自分の意思を表現したということはその発話者にとって、異なる表現形式は異なる意味を表しているということを意識していることになる。言い方を変えれば、条件表現の各形式そのものは発話場面によって、それぞれ異なる意味が特徴づけられていると考えられる。その各形式の特徴を明らかにするには、そのみで表現できる場合を考察することが必要である。前頁の表3にまとめてあるように、一形式しか使用できない場合は次のようになる。

表4 一形式のみ使用可能

「ば」形式	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校に近ければ、家賃が高くていいです。</li> <li>○ これだけあれば、普段の生活は困らない。</li> <li>○ 練習が楽しければこそ、上達が早くなる。</li> <li>○ スイッチさえ入れば、すぐ使えます。</li> </ul>
「たら」形式	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 食事が済んだら、私の部屋に来てください。</li> <li>○ 京都に行ったら、一緒に寺巡りをしましょう。</li> <li>○ ご飯を食べたら、10時まで勉強します。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 夏休みになったら、一緒に旅行に行きませんか。</li> <li>○ 10時になったら、私の研究室に来てください。</li> </ul>
「と」形式	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 男はポケットから鍵を取り出すと、ドアを開けて部屋に入った。</li> <li>○ 部屋に入ると、帽子を取った。</li> <li>○ ボールはころころ転がると、穴の中に落ちました。</li> <li>○ サッカーの試合を見るため、部屋に入ると急いでテレビを付けました。</li> </ul>

#### 3.2.1 「ば」形式について

「ば」形式条件文には取り立て助詞の「だけ」、「さえ」、「こそ」を入れることによって、目的達成の条件の「最低限性」と「必要性」を強めることができる。また、「ば」形式の後件が望ましくない結果を表す場合には、制限があると蓮沼（2001）などの研究で指摘されている<sup>4</sup>。したがって、以下のような三形式可能の場合には、望ましい結果の(8)では、三形式使用が可能

になるが、後件が話し手にとって望ましくない結果である場合には、「ば」形式は使用できないのである。もちろん、結果の望ましさという判断は話し手が下すものであり、発話意図によって、「気分が悪くなりたい」と思う場合であれば、「ば」形式が一番ふさわしいものになると考えられる。

(8) この薬を {飲めば／飲むと／飲んだら}、気分が良くなります。

(9) この薬を {\*飲めば／飲むと／飲んだら} 気分が悪くなります。

また、ソルヴァン・ハリリー（2005）では、「ば」形式条件文のモダリティー成立制約の妥当性を検証するため、日本語母語話者を対象に調査をしたところ、「ば」条件文の許容度について、次のように指摘している。

(10) 買い物をしてくれれば、部屋の掃除はやらなくてもいいですよ。

(11) 8時に会社に来れば、5時に帰ってもいい。

(12) 食器洗いをしてくれれば、千円あげるよ。

(10)、(11)の例文では、主節のモダリティーが「表出の許可」を表す場合は、「たら」よりも「ば」形式の支持率が高いと指摘している。(12)のような前件と後件の動作主が異なる場合は、「ば」形式の支持率は100%だという調査結果があった。その理由としては、「ば」形式条件文が「交換条件」として機能し、それが誘導推論の解釈を強く引き起こすのであるとしている。

本稿は、(12)のような前件が聞き手の意志的な行為であり、後件が話し手の意志的な行為が現れる「ば」形式条件文はその前件が交換条件というよりも、話し手が聞き手の期待する目標を実現させてあげる必要な最低限の条件であると考え。「千円ほしい」と思っている相手に向かって、「じゃ、ほしいなら、食器洗いをしてくれれば、あげるよ」と使用場面が考えられる。「ば」形式は「裏の意味」が含意される表現なので、「してくれなければ、あげません。」という理解は自然に感じ取れると考える。この場合には、「千円ほしいなら、食器洗いをしてくれないといけない」という表現の使用も十分考え得る。

このように、「ば」形式の意味特徴は「最低限な必要条件」を示すことにありと規定する。本稿では、「ば」形式が一番「条件らしい条件」<sup>5</sup>を表す形式であると考え。

### 3.2.2 「たら」形式について

「たら」形式については、既に多くの先行研究で「時間的な前後関係」を表すという意味特徴を持っていると指摘されている。表1と表2に示したように、動作性の条件の実現と未来の時間点そのものを条件にする条件文には、「たら」形式しか使用できないことから、「たら」が「条件の実現」を表す形式であることになる。動作の完了は時間の経過によって得るものであるため、「たら」形式は「時間」のマークであると考えられる。よって、「たら」形式の意味特

徴は「条件の実現」つまり、「未来にある時間点」を示すことにあると規定する。

### 3.2.3 「と」形式について

表3と表4に示した「と」形式の例文を見てわかるように、「と」形式の条件文の後件には、「表出」や「働きかけ」など意志的な動作を表す表現が来ないというのが大きな特徴である。「と」形式のみ使用できるのは、事実関係の同じ主体の動作や作用の連続を表す場合に限定されている。この場合は、既に、現実になった事実を述べる表現であり、話し手が自分以外の他人の連続的な動作を外部の観察者という視点から「静的な事態」として述べると考える。したがって、「と」形式は仮定関係にしても事実関係にしても一番「結果らしい結果<sup>6</sup>」を表す意味特徴を持つ表現であると規定できる。このような規定は従来の研究による「自然・当然の結びつき」、「現実に観察される継起的な事態の表現」「当然の結果、習慣的な結果、あるいは不可避免的な結果」などの意味特徴の指摘からも支持されると考える。

以上の分析は仮定的条件文の使用動機からも裏付けられると考える。本稿では、仮定的条件文の使用動機を次の三パターンに分類できると考える。

#### A 因果関係による現象及び事態を叙述するための条件文（事態観察述べ立て条件文）

客観的な観察者として、因果関係を持つ二つの事態を観察し、その成り行きを推測し客観的に述べる。表3にある「三形式可能」の例文がこれに当たる。

#### B 結果達成を図るための条件求めの条件文（条件指向条件文）

主観的に自分にとって望ましい結果が達成できるように、整えるべきあるいは求められる条件に焦点を当てて述べる。表3にある「ば」一形式のみの例文がこれに当たる。

#### C 条件成立次第で行動する条件文（行動的結果指向条件文）

仮に条件が整ったり成立したりした場合には、どんな行動を取るのかあるいは、取ってほしいのかなどといった意志変化に焦点を当てて述べる。表3にある「たら」形式の一形式のみと「ば」「たら」二形式可能の例文がこれに当たる。

このように分類してみると、「と」形式が意志的に行動を取るような「行動的結果指向条件文」には使えないため、その一番の意味特徴は「結果らしい結果」を表すことになる。結果の望ましさに関係なく、その条件が表せる「たら」形式より、望ましい結果を実現させるために求められる条件しか表せない「ば」形式の方が一番「条件らしい条件」を表すのが意味特徴であるとする。また、動作性の条件の実現と未来の時間点そのものを条件にする条件文には、「たら」形式しか使用できないことから、「たら」が「条件の実現」を表す形式であることになる。

### 3.3 相関要素の抽出

以上で三形式の意味特徴を考察してきた。以下では、空間モデルの構築に相関する要素を抽出し、それらの相関要素を座標軸とし、条件表現における言語空間モデルの構築を試みる。

本稿では、「ば」形式を用いた「条件指向の条件文」を用いて行われた発話行為の目的は話し手が後件のある期待する望ましい結果の実現には、前件の必要条件が最低限に必要だということ述べることにあると考える。その「必要条件」は話し手が個人の論理による推論から出たものが多いとされている（奥田 1986）。よって、本稿は、言語主体が「条件の必要性」への認識の度合いを条件文相関要素の一つにすると主張する。

「と」形式を用いた「事態観察述べて条件文」は言語主体が認知客体世界にある二つの事柄間の因果関係を客観的に観察し、述べているものであり、その発話行為の焦点は仮定的な世界において、前件と後件に結ばれた因果関係における結果出現の必然性を強調して述べることにあると考える。本稿は、言語主体が条件文の「結果出現の必然性」への認識の度合いを条件文相関要素の一つにすると主張する。「たら」形式が仮定的な因果関係を表す表現に使用することができるが、しかしながら、自然界における反復された恒常的な因果関係や真理、習慣など一般的な事実を述べる表現には使えない。「たら」形式を用いた「行動的結果指向条件文」<sup>7</sup>はある動作や変化の実現を条件に、偶然的な、一回的な事態を表す表現であるとされている。動作や変化の実現は時間の流れにそっていつでもできることなので、「たら」形式の使用には「条件」というより「その条件の実現性」つまり「時間性」という要素が前面化されていると考える。「たら」条件文の典型的な使い方が前件も後件も動詞の場合が圧倒的に多く、その場合は前件が「条件複文」の従属節というより、「未来の時間を表す状況語」という意味合いのほうが強く感じられると考える。この種類の条件文が中国語に訳す場合、「假定複文」と「条件複文」の関連詞をどちらも使わず、「(等) …以后, (之后) 再…」の表現が一番ふさわしいと考える。ここで、中国語の「等」という言葉を用いることによって、事態の実現を条件にしているというニュアンスが窺われる。もちろん、「等」を用いなくても、「…以后, (之后) 再…」だけでも、典型的な「たら」形式条件文の中国語訳として意味が通じる。このように、中国語訳にする場合、明らかに時間表現になると言えるわけである。そこで、本稿は「前件条件の実現」への認識の度合いを条件文相関要素の一つにすると主張する。さらに、この「条件の実現」は「時間性」の具現でもあると考える。

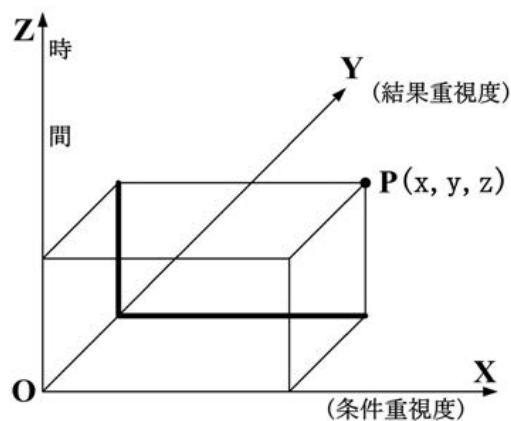
条件文を理解する際、どの言語においても「条件」、「結果」、「条件の成立」という三つの要素が重要視されるが、日本語という言語は「ば」「と」「たら」三つの形式によって、見事に役割分担を実現させていると思われる。つまり、日本語条件文の多形式現象は言語の形式とその機能の対応を示していると思われる。以上で述べてきたように、「条件の必要性」、「結果出現

の必然性」、「条件の実現性」（つまり「時間性」）は「ば」形式、「と」形式、「たら」形式の条件文を使い分ける上で重要な相関要素であると考えられる。むろん、条件文には、客観世界の自然現象、真理、法則、あるいはある特定の個体が条件反射的な個人習慣などを表すものも数多くあるが、こういう条件形式を用いた文も本稿で構築する三次元モデル空間をもって解釈できるし、空間における位置づけができると思う。

空間を構築するには、以上で見てきた「条件の必要性」、「結果出現の必然性」、「条件の実現性」（つまり「時間性」）の三要素のほかに、言語主体に関するもう一つもっとも重要な要素がある。それは、言語の使用者であり、言語主体のことである。本稿では、言語主体（話し手）が各相関三要素への認識の強弱を「度合い」という概念で表し、空間モデルの構築とその解釈を試みる。

#### 4. 条件文の三次元空間モデルの構築

前節では条件文の理解と使用に関わる重要な相関要素を「条件の必要性」、「結果の必然性」、「条件の実現性」（つまり時間性）と三つ抽出した。また、「度合い」という概念を用いて、言語主体（話し手）が各相関三要素への認識の強弱を表すと規定した。この節では、三要素と対応に、「条件重視度」、「結果重視度」、「時間」という三つの言語認識をそれぞれ条件文空間モデルのX軸、Y軸、Z軸にする。この三つの軸を座標軸にしてできた三次元直行座標系は日本語の条件表現における言語空間モデルになると仮定する。その空間モデルは次の図一に示している。



図一 条件表現の三次元空間モデル

図一に示した空間モデルをもって、「ば」・「と」・「たら」三形式を空間に位置づけられると考える。また、各形式の意味用法の使い分けの理解も説明できると考える。空間にある任意



的な点を点P (x, y, z) とする。この点Pはある条件文を意味する。点P (x, y, z) の各座標値に変化があることは、話し手が条件文における条件重視度、結果重視度、条件の実現等の要素への認識に変化が起こったということになる。その変化によって、点Pの空間にある位置も変化する。その結果、言語化された条件表現の形式そのものも変化を行わなければならないことになる。理論的に言うと、言語表現形式の変化というものは連続的なものであり、すなわち、文法上には、二形式或いは三形式の表現ができるとしても、その各形式間には微妙なニュアンスを持っていて、発話者が常に自分の発話意図に合わせて、「条件」に焦点を当てて表現するのか、「その結果」に焦点を当てて表現するのかと意識しながら、表現形式を選択するわけなので、形式の変化も連続的なものであると考える。認知の視点から見ると、それらの表現形式の微妙な差異は発話者の異なる認知活動によるものだと思われる。語用論の視点から見ると、それは発話者の発話意図やコンテキストによるものだと見られているようである。

以下では、条件文の例文を用いて、原点、各軸、平面、空間にある任意の点という順で空間モデルの解釈を行ってみる。

#### 4.1 座標系の原点への理解

図一1では、O (0, 0, 0) という点は三次元座標系の原点である。原点が表す条件文は「条件の必要性」、「結果の必然性」、「時間性」という三つの相関要素をいずれも強調せず、ひいては無視するような発話状況に用いられるものであると思われる。日本語の条件文には前件が確実に実現される条件であり、話し手が前件の条件が成立した時点で後件の結果が出るという事態を客観的に述べるものがある。本稿では、「確定的な条件文」と呼ぶことにする。次の例は空間の原点が示しているものである。

(13) 明日に {なれば／なると／なったら}、血液検査の結果がわかります。

(14) 来週に {なれば／なると／なったら}、暇になります。

これらの例文では、前件が「明日になる」、「来週になる」というような条件で、いずれも確実に実現されるものであるので、「ば」形式の「明日にならなければ」というような「裏の意味」の含意も働かなくなると考える。三形式とも使用可能というのは、一つの事柄を表現する言語形式が多様であるという説明がつくと考える。

#### 4.2 X軸への理解（「ば」軸）



図一2 X軸—「ば」軸

空間モデルのX軸は「条件の必要性」を重視する「ば」軸のことである。

説明の便宜のため、図一1の空間モデルにあるX軸を一次元化して図一2で提示する。矢印のついた横線を「ば」軸と規定する。この軸は話し手が条件文の条件の必要性への認識度を表すものである。軸の上方にある黒い矢印の図形は言語主体が条件重視度への認識の度合いを表す。(以下図一3・図一4同様)。軸の右側に付いた矢印はこの「ば」軸が変わらない軸ではなく、話し手が条件の必要性への認識が強まるにしたがって、右のほうへとどんどん延長していくことを意味している。

図一1では、三次元空間におけるX軸にある点は座標値が(X, 0, 0)になる点の集合であるとされる。これらの点が表す条件文は話し手が条件文の前件に提示する条件の必要性を重視するものである。本稿は「ば」条件文の推理過程が「後件の結果の実現には、前件の条件が必要だ」というものであると考える。こういう条件文は条件が成立した時点にどんな結果が出るのか、条件の実現性がどうなるのかについては強調しない。話し手が「ば」形式の条件文を用いて、後件にある期待される事態の実現には前件の条件が最低限に必要すると個人的な論理から述べる。こういう条件文は中国語で表現すれば、「成事条件句」と言われている。つまり、後件の事態を実現させるために、何とか条件を整えるという発話意図を持つ条件文のことである。図一2の黒い矢印の図形はこのX軸を延長していけばいくほど、話し手が条件文の条件の必要性という要素への認識度、重視度が増していくことを意味している。X軸の延長線にある条件表現の言語形式は「さえ」を用いるものがあり、また、この軸を無限に延長していけば、例(17)のように、「～なければならない」というような唯一条件を表す言語形式に変わっていくことになると考えられる。表現形式が変わったものの、その機能としては、ある期待する目的の達成にはなくてはならない必要条件を表すことに変わりがないと考える。以下のものはこの軸にある例になると考えられる。

- (15) お金（さえ）があれば、何でも買えます。
- (16) これを飲めば、運動しなくても痩せられます。
- (17) ゆとりのある生活をするには、お金がなければならない。

この「ば」軸にある例文は「条件の必要性」に焦点を当てて表現するものであるため、「条

件の必要性」への認識度が強いほど、仮定を表す副詞「もし」と共起しにくいと考える。

#### 4.3 Y軸への理解（「と」軸）



図—3 Y軸—「と」軸

図—1の空間モデルのY軸は「結果出現の必然性」を重視する「と」軸のことである。

図—3は空間モデルにあるY軸を一次元化して、提示するものである。矢印のついた横線を「と」軸と規定する。この軸で話し手が条件文の結果出現の必然性への認識度を表すことにする。軸に付いた矢印はこの「と」軸が変わらない軸ではなく、話し手が結果出現の必然性への認識が強まるにしたがって、右のほうへとどんどん延長していくものであると意味している。

図—1では、三次元空間におけるY軸にある点は座標値が(0, Y, 0)になる点の集合であるとされる。これらの点が表す条件文は話し手が条件文の後件にある結果出現の必然性を重視するものである。本稿は「と」条件文の推理過程は「前件の事態があると仮定して、こういう前件があって、必ず後件の結果が出る」と考える。こういう条件文は前件の条件とその実現については強調しない。話し手が「と」形式の条件文を用いて、ある条件が成立した時点で、必ず後件の結果が出現するという結果出現の必然性への認識を述べる。図—3の軸の上方にある矢印の図形はこのY軸を延長していけばいくほど、話し手が条件文の結果出現の必然性という要素への認識度、重視度が増すことを意味している。この軸を無限に延長していけば、(19)のように、文末が過去形で、現実的事態を表す表現になる。このように文の表現形式が変わっていくことになるが、その機能としては、前件の条件が存在すれば必ず後件の必然的な結果が出るということが変わらないものとする。「と」形式の条件文を使って、すでに実現された事態を述べ立てることもできるのである。以下のものはこの軸にある例になると考えられる。(19)は事実関係の用法になる。

(18) この薬を飲むと眠くなります。

(19) この薬を飲むと眠くなりました。

この「と」軸にある例文は「結果出現の必然性」に焦点を当てて表現するものであるため、その焦点への認識度が強いほど、副詞「もし」と共起しにくいと考える。

#### 4.4 Z軸への理解（「たら」軸）



図一4 Z軸—「たら」軸

図一1の空間モデルのZ軸は「時間性」を重視する「たら」軸のことである。

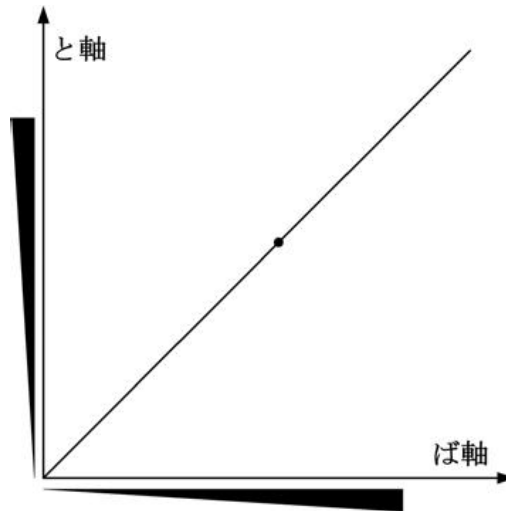
図一4は空間モデルにあるZ軸を一次元化して、提示するものである。矢印のついた横線を「たら」軸と規定する。この軸で話し手が条件文前件にある動作の実現性への認識度を表すことにする。軸に付いた矢印はこの「たら」軸が話し手が動作実現性つまり時間という概念への認識が増すにしたがって、右のほうへとどんどん延長していくことを意味している。

図一1では、三次元空間におけるZ軸にある点は座標値が $(0, 0, Z)$ になる点の集合であるとされる。これらの点が表す条件文は話し手が条件文の前件の条件の実現性を重視するものである。つまり時間性を重視する表現である。こういう条件文は前件の条件と後件の結果をあまり強調しない。話し手が「たら」形式を用いて、前件条件の実現に焦点を当てて表現する。条件文の時間性という特徴が前面化されると思われる。図一4の軸の上方にある黒い矢印の図形はこのZ軸が延長していけばいくほど、話し手が時間性という要素への認識度、重視度が増していくことを意味している。この軸を無限に延長していけば、(22)のように、「十時に」などの未来にある時点を述べる言語形式になると思われる。以下のものはこの軸にある例である。

- (20) ホテルに着いたら、電話をしてください。
- (21) 二十歳になったら、一人で旅行したいです。
- (22) 十時になったら、私の部屋に来てください。

この「たら」軸にある表現は、前後事態の時間的な前後関係が前面化されているため、場合によっては、副詞の「もし」との共起ができないと考える。

#### 4.5 XY平面への理解（「ば」と」平面）



図一5 XY平面—「ば」と」平面

図一5は図一1の三次元空間におけるX軸とY軸からできた平面を二次元化してイメージしたものである。

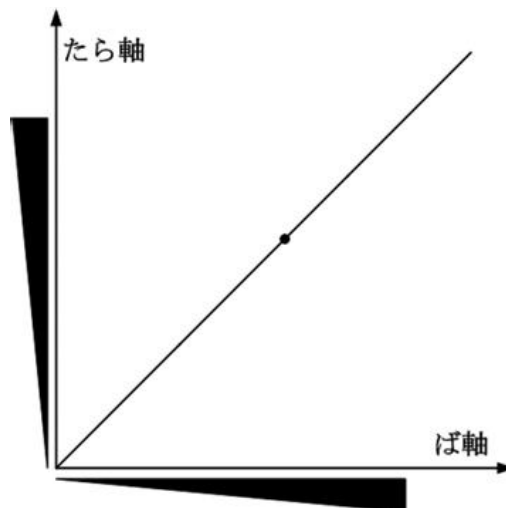
図一1では、三次元空間におけるX軸とY軸からできた平面にある点は座標値が(X, Y, 0)になる点の集合であるとする。この平面にある点は一般的な真理、恒常的な自然現象、法則、あるいはある特定の個体、グループの習慣など時間概念を超えた因果関係を表すものである。これらの事態を表現する場合、言語形式は「ば」形式も「と」形式もいずれも使用できると思われる。しかしながら、実際の言語活動においては、発話現場のコンテキストによって、発話者が選んだ表現形式が発話意図によって異なってくるものと思われる。「ば」形式を使用する場合は発話者が条件文の前件の条件の必要性に焦点を当てて発話することになり、「と」形式を使用する場合は発話者が条件文の後件の結果出現の必然性を重視して発話することになると思われる。この平面の角の二等分線にある点はどちらの形式を使ってもたいしたニュアンスの違いが見られないような表現であると思われる。次はこの平面にある表現の例文である。この平面にある条件文は恒常的な因果関係を表すものであるため、副詞の「もし」と共起しにくい。恒常的な真理などを表す場合には、文末に「ものだ」を付けることができる。(益岡 (1993) P3)

- (23) 春に {なれば／なると}、花が咲きます。
- (24) あの人はお金が {あれば／あると}、すぐパチンコに行きます。
- (25) 体温が {上がると／上がれば}、汗が出る。汗が {出ると／出れば}、体温が下がる。
- (26) 年を {取れば／取ると}、体も弱ってくるものだ。

また、次のような従来の諺、慣用句、習慣用法などで、「ば」形式しか用いられないのが「ば」形式の特殊用法とされている。このような表現もこの平面にあるものとするが、諺には「と」形式があまり見られないのは言語使用の社会的な使用慣習に関係していると考えられる。

- (27) 犬も歩けば棒に当たる。
- (28) 三人寄れば文殊の知恵。
- (29) 始めよければ終わりよし。
- (30) 住めば都。

#### 4.6 XZ平面への理解（「ばーたら」平面）



図一6 XZ平面—「ばーたら」平面

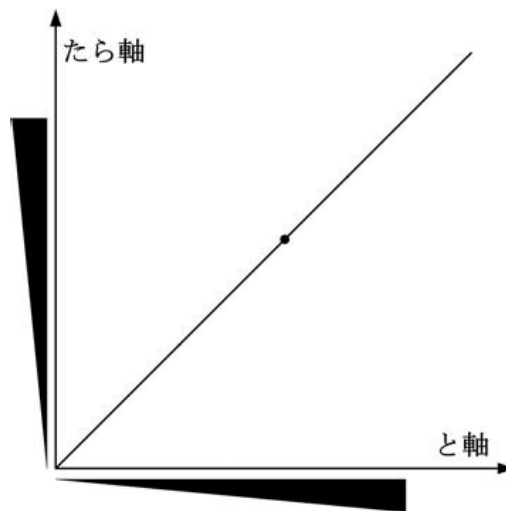
図一6は図一1の三次元空間におけるX軸とZ軸からできた平面を二次元化してイメージしたものである。

図一1では、三次元空間におけるX軸とZ軸からできた平面にある点は座標値が(X, 0, Z)になる点の集合であるとされる。この平面にある点は話し手が前件の条件が成立した時点で、自分の意志、願望を表明したり、聞き手へ依頼、命令、指示、勧誘、禁止などを要求したりすることを述べるものである。こういう条件文は条件文の結果出現という要素を無視する表現である。条件と条件の実現を重視して発話するものが多いと思われる。このような条件文は中国語では「行事条件句」と呼ぶことができる。一番の特徴は「条件を見た上で、後件の行為を行う」点であると考えられる。この平面にある点は「ば」形式も「たら」形式も使用できる。前にも述べたように言語形式はいずれも可能であるが、実際の言語活動においては、(33)の例を見て分

かるように、発話現場のコンテキストによって、発話者が選んだ表現形式が発話意図によって異なってくるものと思われる。「ば」形式を使用する場合は発話者が条件文の前件の条件の必要性に焦点を当てて発話することになり、「たら」形式を使用する場合は発話者が条件文の条件の実現性を重視して発話することになるとと思われる。また、この平面の角の二等分線にある点はどちらの形式を使ってもたいしたニュアンスの違いが見られないような表現であると思われる。一番多く見られたのは、(31)、(32)のような前件が状態性の述語である場合であるが、先行研究でもこの場合は、二形式の互換性が最も高いと指摘されている。次の例はこの平面にある表現である。この平面にある条件文は発話意図によって、副詞の「もし」を付けることによって、仮定的な語気を強めることができると思う。

- (31) {安かったら／安ければ}、買いたいです。
- (32) 何か問題が {あったら／あれば}、いつでも指摘してください。
- (33) 仕事が早く {終われば／終わったら}、お酒を飲みに行きましょう。

#### 4.7 YZ平面への理解（「とーたら」平面）



図一7 YZ平面—「とーたら」平面

図一7は図一1の三次元空間におけるY軸とZ軸からできた平面を二次元化してイメージしたものである。

図一1では、三次元空間におけるY軸とZ軸からできた平面にある点は座標値が(0, Y, Z)になる点の集合であるとされる。この平面にある点は話し手が前件の条件が成立した場合、後件の客観的な結果が出るということを述べる条件文である。こういう条件文は前件の条

件という要素より、後件の結果出現に焦点を当てて発話するものだと思われる。ただし、この平面にある表現は後件が望ましくない結果がほとんどであるというのが一番の特徴であると考えられる。この平面にある点は「と」形式も「たら」形式も使用できる。前にも述べたように言語形式はどちらも可能であるが、実際の言語活動においては、発話現場のコンテキストによって、発話者が選んだ表現形式が発話意図によって異なってくるものと思われる。「と」形式を使用する場合は発話者が条件文の後件の結果出現の必然性に焦点を当てて発話することになり、「たら」形式を使用する場合は発話者が条件文の条件の実現性を重視して発話することになると思われる。(34)、(35)、(36)の例を参考されたい。また、この平面の角の二等分線にある点はどちらの形式を使ってもたいしたニュアンスの違いが見られないような表現であると思われる。(37)、(38)の例のような前件が状態性の述語である場合は、その類であると考ええる。次の例はこの平面にある表現である。この平面にある条件文は発話意図によって、副詞の「もし」を付けることによって、仮定的な語気を強めることができる。と考える。「もし」との共起の許容度については、「結果指向」形式の「と」より、「たら」の方が高いと考える。

- (34) あまり {勉強すると／勉強したら}、病気になります。
- (35) あんな話を {すると／したら}、先生に怒られますよ。
- (36) 甘いものばかり {食べると／食べたたら}、太ってしまいます。
- (37) あまり {高いと／高かったら}、商品が売れなくなる。
- (38) 日本語が {分からないと／分からなかったら}、日本の生活は楽しくなりません。

#### 4.8 空間中にある任意点P (x.y.z) への理解

図一1にある座標値はいずれもゼロでない空間にある任意点P (x.y.z) は「ば」、「と」、「たら」形式の三形式は、いずれも使用可能な条件文のことである。言語形式はどちらも可能であるが、実際の言語活動において、発話現場のコンテキストによって、発話者が選んだ表現形式が発話意図によって異なってくるものと思われる。つまり、条件文の表す意味が分化されると考えられる。使用した言語形式によって、条件の必要性か結果出現の必然性か条件の実現性かのいずれかを強調するものになると考える。話し手が強調する要素が異なることによって、点Pは空間においてその強調される意味の軸へと正方向的に移動することになると考える。以下の例文を参考されたい。このタイプの三形式使用可能な条件文は発話意図によって、副詞の「もし」との共起が可能である。

- (39) 練習 {すれば／すると／したら}、上手になります。
- (40) 値段が {安ければ／安いと／安かったら}、よく売れる。



## 5. 反事実条件文について

本稿で構築したモデルは「仮定的な世界における条件文の使用や理解」を対象とするものである。そのため、「反事実条件文」の位置づけはこのモデルには、反映されてはいない。前述したように、「なら」形式を含めて、「反事実条件文」に使用できないのは、「と」形式のみである。本稿では、「と」形式条件文は、「事態観察述べ条件文」と規定してあるように、言語主体が観察した事柄を客観的に述べ立てるのが使用動機であるため、「反事実条件」には使用できないのは当然だと考える。つまり、「と」形式が仮定的な世界においても、現実の世界においても、このような表現機能が果せるが、前件か後件に発生しなかったことを観察し、述べることができるわけがないのである。

本稿で提案したモデルは「時制」という概念を取り入れていないため、「反事実条件文」への考察を取り扱うことができない。「ば」軸と「たら」軸がそれぞれ逆の方向かその裏の方向へ延びていくようにイメージしてみれば、それぞれ、「反事実条件文」の位置づけができるのではないかと考える。紙面の都合で、本稿では、これ以上触れないことにする。

ここまで、空間モデルの構築を検討してきた。以上述べてきたように、本稿で提案した空間モデルは多要素空間であり、ダイナミックの空間でもある。空間モデルの多要素性が形式の多様性から生じたものであり、その動的な特徴づけができるのは、言語主体の多様性によるものだと考えられる。日本語の条件表現における言語形式の多様化と個人差という特徴は認知主体の異なる認知結果を示していると思われる。

## 6. おわりに

以上で述べてきたように、本稿では、「条件の必要性」、「結果出現の必然性」、「時間性」という三つの相関要素を抽出し、三次元座標系のX軸、Y軸、Z軸とし、言語主体の各相関要素への認識の変化を表す「度合い」という概念を取り入れ、条件文の三次元空間モデルを構築してみた。一つの空間、二つの平面、三つの軸という視点から条件表現の空間にある点の意味用法の解釈と理解を行ってきた。本稿の結論を以下のようにまとめる。

1. 条件表現はある言語空間にあるものであり、理論的に言うと、すべての条件文はこの条件表現の言語空間に位置付けられると主張する。
2. 認知主体の同じ事柄への認知が異なることによって、その認知結果を表す言語形式も異なってくる可能性が十分に考えられる。その認知主体の認知差異は条件表現の空間においては、話し手が条件文の各相関要素への認識の度合いの相違に現れている。それぞれの言語主

体の認識の差異は条件表現の空間に動的な特徴をつけている。

3. 条件文の空間モデルが言語空間モデルの一部に過ぎないと主張する。本稿で提案したモデルの外側に関連意味領域の「目的複文」「原因・理由文」「時間表現」などの空間モデルが存在することも十分あり得ると考える。

本稿は「ば」「と」「たら」三形式を対象に、言語空間モデルという視点から、条件文の多形式現象と各形式の多義現象を考察してみた。図式やモデルなどの視点は、複雑な日本語の条件表現をより体系的、より合理的に理解する上で、一つの可能性を提供してくれるものになると考える。こういうモデルを日本語教育の現場に生かすことができれば、学習者が条件文の置き換え可能と置き換え不可能の用法を効率的に理解することができるのではないかと思われる。しかし、このような方法で、今まで、理解が困難で、解説が複雑であるとされている条件文を扱うのは一つの新たな試みにすぎないと思われる。理論的にも検証的にもたいへん未熟なものがあると思われる。また、三形式以外の数多くの条件表現は本稿で構築した条件表現の空間に位置づけられるかどうかというような問題も明らかになっていない。位置づけられるとしたら、どういう形で存在しているのか、この空間への接点はどこにあるのであろうかという問題は、今後の研究課題として検討していきたいと思う。

注：

- 1 「条件文と理由文」については、異なる立場が見られるが、ここでは、言語学研究会（1985a, b）に従い、条件文を「仮定的な因果関係を表す」であると見る。
- 2 本稿で規定した「事実関係」を表す条件文は「前後とも既に事実になった事態であり、条件文の形式を用いて表現した文のこと」と、前田（1991）で指摘した次のような「事実的条件文」の二種類あると規定している。
  - ここまで来れば、彼も追いかけては来ないだろう。
  - こんな雪が積もると、家から出られない。
  - ここまで送ってもらおうと、もう一人で帰られる。前田（1991）にも指摘があったように、これらの「事実的条件文」は理由文とほとんど同義になる。そこで、本稿では、このような条件文を「条件形式を借りて表現した理由文」として扱い、条件表現の言語空間モデルの裏側か外側かに存在する原因・理由文の言語空間モデルに位置づけられると主張する。ここで挙げた3例のように、条件形式を用いて現実になった事実に基づいて推測したり判断したりすることができるのは、本稿では、言語主体による表現方法のレトリックであると考えられるし、語用論的な観点から見れば、言語使用心理によるテクニックとも考えられると主張する。用法の羅列としては、一応表3に入れることにする。
- 3 本稿では、この種の用法については、形式による使い分けの考察ができないため、先行研究に従って、既に指摘されていた例文そのまま表にまとめることにする。

- 4 井黒 (2009) や前田 (1996) にも「後件の事態の望ましさ」について言及している。井黒 (2009) は「前件の性質に関係なく、「バ」の後件は「望ましくない結果」の内容になりにくい」としている。前田 (1996) は「トやタラとは異なり、バは後件の実現を望んでいる時に用いられ、望まない後件を引き起こす条件は表せないという特徴がある」と指摘している。
- 5 この点については、藤城 (2000b-P34) にも指摘があった。本稿でも、この立場に従う。
- 6 この点については、以下の二冊の辞書から「結果」の項の一部を引用して説明を進める。
- 『日本語大辞典』(講談社)による説明：
- 「結果」① ある原因によってある状態が生じること。その生じた最後の状態。② 物事が作用し、それによってある事が起こること。また、その起こった影響、変化。
- 『大辞泉』による説明：
- 「結果」① ある原因や行為から生じた結末や状態。また、どのような状態が生じること。
- 以上の辞書による説明を見て分かるように、「と」形式の条件文は後件が非意志的な「静的な状態」を表す場合が圧倒的に多いことから、「結果らしい結果」を表す形式であると本稿で考える。
- 7 森田 (1967) は、「[たら]によって提示される条件は、起こってしまった場合を顧みる立場、すなわち観念的過去の立場である。この条件が起こってしまった時と場に立って、話し手はそこに生起する事態を眺めるという表現機構を取る」と指摘しているが、本稿では、基本的にこの立場を認める上に、「事態を眺める」という機構を取るに留まらず、話し手が積極的に、働きかけしたり、表出したりするのが「たら」形式条件文の使用動機であると主張する。

## 参考文献

- 赤塚紀子 1998 『モダリティと発話行為』 日英語比較選書3 研究社出版
- 有田節子 1993 「日本語条件文研究の変遷」 益岡隆志編『日本語の条件表現』 PP225-278. くろしお出版
- 1996 「因果の言語学」『月刊言語』 25(5) PP20-23
- 2001 「条件文研究の最近の動向」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』 9号 PP57-84
- 2006 「条件表現の研究の導入」 益岡隆志編『条件表現の対照』 くろしお出版 PP3-28
- 2007 『日本語の条件文と時制節性』 くろしお出版
- 井黒 玲 2009 「日本語の条件表現「タラ」と「バ」の使い分けの一考察」 富山大学国語教育 (34) PP26-19
- 池上嘉彦 2011 「日本語と主観性・主体性」 澤田治美編『ひつじ意味論講座第5巻主観性と主体性』 PP49-69  
ひつじ書房
- 奥田靖雄 1986 「条件付けを表現するつきそい・あわせ文——その体系性をめぐって——」『教育国語』 第87号PP2-19 言語学研究会・構文論グループ
- 1985a 「条件付けを表現するつきそい・あわせ文」(一) —その1・まえがき—『教育国語』 第81号

言語空間モデルの視点から見た日本語の条件文

PP19-31 むぎ書房

1985b 「条件付けを表現するつきそい・あわせ文」(三) —その3・条件的なつきそい・あわせ文—

『教育国語』第83号 PP2-37 むぎ書房

蓮沼昭子 1985 「ナラとトスレバ」『日本語教育』56 PP65-78

———— 1993 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』PP73-97. くろしお出版

蓮沼昭子・有田節子・前田直子 2001 『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版

藤城浩子 2000a 「(ノ) ナラの意味と特徴」三重大学日本語学文学(11), PP92-81

———— 2000b 「ト、バ、タラ—基本的な意味からの用法検証—」三重大学留学生センター紀要第2号  
PP25-38

前田直子 1991b 「条件文分類の一考察」『日本語学科年報』PP55-79. 東京外国語大学

———— 1991a 「論理文」の体系性——条件文・理由文・逆条件文をめぐって——『日本学報』10 PP29-42

———— 1996 「バ・ト・ナラ・タラ—仮定条件を表す形式」宮島達夫・仁田義雄編 PP483-495

『日本語類義表現の文法 下 (複文・連文編)』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法』改訂版 くろしお出版

———— 1993 「日本語の条件表現について」益岡隆志編『日本語の条件表現』PP1-20. くろしお出版

———— 2006 「日本語における条件形式の分化—文の意味的階層構造の観点から—」. 益岡隆志編『条件表現の対照』くろしお出版 PP31-46

森田良行 1967 「条件の言い方」『講座日本語教育 第三分冊 早稲田大学日本語研究教育センター』  
PP86-101

———— 1990 『日本語の類意表現』創拓社

W・M・ヤコブセン 1990 「条件文における「関連性」について」『日本語学』9-4 PP93-108

山口堯二 1969a 現代語の仮定条件法——『ば』『と』『たら』『なら』について『月刊文法』1-2 むぎ書房

劉 曉華 2006 「条件句的生成機制与“ば”“と”“たら”的异同」『日本語学習と研究』3. PP61-66 《日本語学習と研究》雑誌社

———— 2007 「关于日语条件句三维状态空间模型的研究」. 『日本語学習と研究』4 《日本語学習と研究》雑誌社

梅棹忠夫・金田一晴彦・坂倉篤義・日野原重明 監修 1989 『日本語大辞典』カラー版 講談社

松村明 編 1998 『大辞泉』第一版 小学館

国際文化フォーラム2002 『漢語話者のための分かりやすい日本語シリーズ3 類義表現の使い分け』国際文化交流中心

劉 曉 華

**【付記】**

本論文は、2011年度中国教育部人文社会科学研究一般項目、課題番号（11YJc740069）「認知言語学视角下的日语条件句习得研究」（筆者による日本語訳：認知言語学の視点における日本語条件文の習得研究）（代表 劉曉華）の研究成果の一部である。